

トピックス

長距離移動性イネウンカ類の飛来源地帯における近年の発生動向

農業技術研究機構九州沖縄農業研究センター ^{まつ}松 ^{むら}村 ^{まさ}正 ^や哉
 農業技術研究機構中央農業総合研究センター ^{わた}渡 ^{なべ}邊 ^{とも}朋 ^{なり}也

昨年秋にイネウンカ類の発生予察と管理を主なテーマとする二つの国際ワークショップが中国とベトナムで開催された。筆者らのうち松村は両者に、渡邊は後者に出席することができた。これらのワークショップにはアジア各国から水稻害虫の研究・発生予察担当者が参加し、イネウンカ類の発生動向に関して最新の情報を得ることができた。そこで本稿では、これら二つの会議の内容を紹介するとともに、イネウンカ類の飛来源地帯における近年の発生動向についてのトピックを紹介したい。

I 国際ワークショップ「品種抵抗性に基づく水稻害虫の持続的管理」

本会議は、2001年10月29～30日に中国・浙江省の中国水稻研究所(CNRR)において、CNRRと国際農林水産業研究センター(JIRCAS)との共催で開催された。本会議は、日中共同研究プロジェクトの共同研究項目「中国における移動性イネウンカ類の総合管理技術の開発」のためCNRRに滞在中の寒川一成氏(JIRCAS)がオーガナイザーとなって行われた。発表題数は、中国14、日本3、ベトナム2であった。

中国からは、共同研究の中心課題である品種抵抗性に基づくイネウンカ類の総合的管理に関する研究発表が主体であった。とりわけ、中国ジャポニカ水稻のセジロウンカ抵抗性機作や遺伝的背景に関する寒川氏らの発表は大変興味深く、共同研究の成果が挙がっていると感じられた。その成果の一部については既に寒川(2000)による解説がある。CNRRの若手・中堅研究者からは、抵抗性検定法の改良、Bt遺伝子を取り込んだ組み換えイネの研究、同質遺伝子系統を使った抵抗性の遺伝子解析、セジロウンカの抵抗性品種に対するバイオタイプ選抜、などの発表があり、いずれも精力的な研究が行われ

ている。また、トビロウンカの吸汁に伴い変化するイネの揮発性成分に対するウンカの卵寄生蜂の誘引、これまで情報が少なかった中国内陸部の四川省重慶近辺のウンカ常発地帯における発生状況、などの興味深い発表もあった。一方、トビロウンカの抵抗性品種に対する加害性の量的遺伝解析、イネウンカ間の種間相互作用、トビロウンカの翅型発現と交尾行動に関わる幼若ホルモン支配機構については、日本における同様の研究に比べ、内容的に若干見劣りするものであった。日本からは、セジロウンカの翅型発現性の遺伝的背景と環境要因の影響(松村)、吸汁・産卵行動の電気的モニタリング法(農業生物資源研究所・服部 誠氏)の発表があった。ベトナムからは、ベトナム北部のセジロウンカ多発生の現状、水稻作付け品種の変遷について発表があった。

II 国際ワークショップ「東アジアにおけるトビロウンカの国際発生予察システムと管理」

本会議は2001年11月13～15日にベトナム・ハノイ市で開催された。本会議は韓国農村振興庁とFAOが主催となり1999年より毎年開かれ、本年は韓国(水原市)、中国(杭州市)について3回目であった。本会議の発足には1998年の韓国におけるトビロウンカの大発生とそれに伴う被害により、国内におけるモニタリング体制の再点検と国際協力によるイネウンカ類発生動態の情報収集の必要性が韓国国内で認識されたことが契機となっている。発表題数は中国7、韓国6、日本3、ベトナム4、タイ1、カンボジア1であった。

中国からは、地理情報システムを用いたイネウンカ類の発生実態の解析と発生予察情報システムArcViewの紹介、国内移動における下層ジェットの影響、気象条件と地形を考慮したウンカの移動ルートと2001年の発生動態、水稻IPM普及用DVDの紹介、このほか、広西省、江西省、広東省、福建省における発生実態の報告があった。韓国からは、イネウンカ類の分類同定技術向上

Recent Occurrence of Rice Planthoppers in the Possible Source Areas of Their Migrants into Japan. By Masaya MATSUMURA and Tomonari WATANABE

(キーワード:セジロウンカ, トビロウンカ, 殺虫剤感受性, 抵抗性品種加害性)